



朝鮮通信使の来日(2)

『第二回・元和通信使』

斎藤弘征

止まらない対馬藩の国書偽造

対馬藩悲願の第一回朝鮮通信使が来日してから十年、元和三年(一六一七)に再び朝鮮通信使が来日することになりました。この実現の裏には、実は対馬藩の様々に理由をこじつけた数回に及ぶ執拗な要求がありました。

こうして派遣を了承した朝鮮国に、正式の通信使派遣を要請する幕府の書契が、提出されました。差出人は、「日本国王源秀忠奉書」と、朝鮮側が要求する通りになっており、またしても対馬藩の偽造になるものだったのです。

元和三年七月五日、鰐浦に到着した通信使一行は、八月二十六日伏見城で將軍秀忠との聘礼を行います。使行録「扶桑録」には、秀忠の丁寧な振る舞いが記され、初期徳川幕府の朝鮮通信使にかけられる期待が、大きかったことを示しています。

九月五日になって將軍返書が朝鮮側に示されましたが、差出人が「日本国源秀忠」となっていたり、他にも非礼な文字や表現があり、とても通信使が受け取れるものではありませんでした。そのまま持ち帰れば、朝廷から前回の使臣たち同様の処罰を受けることになり、朝鮮側は当然受け取りを拒否したのです。解決は無理難題と思われたこの事態。ところが、九日になって朝鮮側の要求通りに書き改められた返書が届いたのです。果たせるかな、またしても対馬藩による偽造国書だ

つたのです。

再びの刷還(連れ帰り)

今回の使命は前回に続き、文禄・慶長の朝鮮出兵の折、捕虜となった人たちの刷還でした。しかしこのことはうまくいきませんでした。使臣は対馬到着早々、「一人の脱落者もないように」と、被虜人の刷還を要求しました。これに対して対馬藩は、「以前と状況は異なり、少年も成人となり、結婚し孫を持つ者も多く、帰国の意思も持たない者もある」と、説明しています。事実、各地で、帰国資金を与えたのに乗船しなかったり、少年の時捕らえられて既に母国語も忘れていたり、日本の父母に恩を受けていることを理由にしたり、一人の脱落者もないように連れ帰ることは不可能でした。連れ帰ることができたのは三百二十一名で、対馬藩の三隻の船に乗せて帰国しました。

義成と調興柳川事件の予兆

寛永十二年(一六三五)対馬藩を揺るがす大事件「柳川事件」が起きます。あわや対馬藩お取り潰しかと思われる瀬戸際に立たされたこの事件はこの頃既に予兆が見え始めていました。

元和元年(一六五)逝去した初代藩主義智を継いだ義成、宗家の重臣として功績のあった調興・智永の子孫調興ですが、この朝鮮通信使来聘の実務処理に大活躍をする調興の姿が見えます。このとき義成も調興もまだ少年。ところが「扶桑録」によると、「(調興は)言葉と礼儀の正しい様子に恭しい心構えや、誠意がこの上なかった。義成は十四歳、調興は十五歳ですべて口ばしが黄色い小児だったが、調興は言語、動作がすこぶる賢くて狡猾で敏捷、義成は愚なようであつたくぼんや

りしていた。島の人たちもまた、調興を優れているように思っていたが、かつて江戸に行つて秀忠の寵愛受けていた」と、述べています。同じ「扶桑録」に、「島内のすべてのことと、一行を接待することを調興が主管している」とも述べ、通信使に随行して抜かりなく振舞う調興の様子が伺えます。このような調興の心の中に、義成に対する優越感と野望が芽生えていたのでしょうか。伏見城での国書偽造のことも知っていたはずは、

もう一つの使命

第二回目の通信使の目的は、一般的に「回答兼刷還」と「大坂平定祝賀」があげられていますが、それにも増して最重要の使命がありました。それは「日本国情の探索」でした。豊臣氏が討伐され再び半島侵略の不安は無くなったとはいえず、家康亡き後の国内安定の状況を確認する必要があったのです。それだけに彼等使臣の日本に関する情報の収集は、広範かつ精細でした。使行録にそれが伺えます。

伏見城で国書を交換し、被虜人を刷還する通信使一行は、十月十三日いよいよ府中を発ち、途中小船越の梅林寺、佐賀の円通寺に泊まり、鰐浦に十六日に到着し宝蔵寺に泊まりました。豊崎から鰐浦に向かう途中、船の上から、「西方にわが国の山容を望見して、一行の上下が皆心をはずまして喜びを抑えることができなかつた。捕虜になつた人たちも皆望見して涙を流した」と、記録「東様上日録」は述べています。抑えていた望郷の念が、一気に弾けたのでしょうか。

(対馬市文化財保護審議会委員)

大きな心で

豊玉中学校二年

安野 匠



ぼくは今までいろいろな人たちに支えられここまで生きてきました。その中でも、祖父には数え切れないほどお世話になり、たくさんの迷惑をかけてきました。

小学校三年生の夏、家の事情でぼくと姉は祖父の家で暮らすことになりました。その時も、父と母に会えなくなつた悲しさを、祖父は優しく受け止めてくれました。「大丈夫、大丈夫。大きくなつたら、また絶対に会えるから、心配しなくていいよ。」やわらかい口調で、いつもぼくの頭をなでながらなぐさめてくれました。さびしい気持ちは消えませんでした。祖父の言葉を聞くと、自然と心が落ち着きました。

祖父の家に暮らしはじめて、一年が過ぎた四年生の秋、その日は

小学校の運動会でした。帰宅すると、姉がだれかと電話で話しています。姉の表情がいつもと違っていたので「だれ？」と祖父に尋ねると、「お母さんだよ。」と教えてくれました。母とは幼いときに別れたきりで、連絡も、どこに住んでいるかもわからないままだったので。母と電話で話すと、何年ぶりに聞く母の声に、ぼくは言葉が見つからず、涙があふれてきました。その時、祖父が「今までよくがまんしてきたな。父ちゃん、母ちゃんがおらん中で、お前たちがようがんばつてきたから神様が会わせてくれたんだよ。」と言ってくれました。そしてぼくはその時初めて祖父が泣くところを見ました。

どんなにつらくても、今まで涙

ひとつ見せなかつた祖父が、ぼくたちの前で泣いたので。そんな祖父の涙に、今までぼくたちのことをどんな思いで育ててきてくれたのかを知りました。

それから二年が過ぎ、小学校卒業を間近にしていた頃、祖父と一緒に近所まで散歩に行きました。祖父は目が見えず、足も不自由な身体障害者です。だから誰かがいないと、そう遠くへは行けないのです。少しずつゆっくりと歩いていると、「中学生になったら、たくさんの友だちをつくって、仲よく過ごせよ。」と言いました。祖父は決して多くは語りませんが、いつも僕の心を温かい気持ちにしてくれました。

祖父と暮らすようになってから五年、ぼくたちは今も三人で過

しています。今思えば、両親がそばにおらず、目の見えない祖父と暮らすようになったぼくたちの心細さより、身体の不自由を抱え、一人で生活していた祖父が、二人の幼い孫を引き取る不安はどれほどのものだったのだろうと考えるようになりました。そして今も、きつとたくさんの心配をかけていると思います。それでも祖父は、いつもぼくたちのことを、大きな心で見守ってくれていた気がします。祖父は何でも一人でできますが、ぼくと姉は自然と家の仕事を手伝うようになりました。祖父が少しでもきつくないように、少しでも喜んでくれるならと、考えて動くことが増えました。これからは祖父にしかられたり、ほめられたりしながら三人四脚で元気に歩いていきたいと思っています。「人は皆、誰かに支えられて、支え合つて生きています。」祖父の周りの人々の、大きな支えがあつてこそこのぼくです。ぼくを見守ってくれる人たちのためにも、自分を大切に、周りの人の気持ちがある人になりたいと思っています。大きな心で見つめてくれる祖父のように。